
オニゴッコ

川犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オニゴッコ

【Nコード】

N6548H

【作者名】

川犬

【あらすじ】

ねえ、オニゴッコしようよ。鬼さんが来たー。僕鬼さんにやられちゃったんだ。だから今度はボクガオマエー——。今回は短編です。

（前書き）

これはフィクションです。信じてはいけません。

「ねえ。鬼ごっこしようよ。」

突然見知らぬ男の子に俺はオニゴッコをさそわれて、とりあえず了承した。

「いいけど2人でやるのか？」

男の子はにやりと笑い、俺を思いつきり――

――俺は、はつとなった。周りを見渡す。俺は鬼ごっこをしようと誘われたはずだ。カーッ。カラスが鳴く。

そこは暗い森林の中で、夜だった。不気味だった。何か出てきそうだ。

「鬼は誰？」

いつの間にか隣に見知らぬ男の子が現れた。あのオニゴッコを誘ってきた男の子だ。

「知らないよ。」

俺はそう返事をする。と男の子はいつの間にかふっと消えた。俺はそれに驚いたが、すぐにその男の子が現れた。

「鬼さんが来たー！」

そして、森の奥へと奥へと行ってしまった。

また、俺は一人になった。とぼとぼと道らしくない道を歩いていると、さっきの男の子が座り込んでいた。

「どうしたんだい？」

俺は質問をしたが無反応だった。何故か胸騒ぎがして、その男の子の顔をそつと覗きこんだ。

「うわあああ――！」

俺は勢いよく後ずさりをした。

「鬼さんに僕やられちゃったんだ。だから今度は僕がオマエヲヤッ

ことをきかなくなっていた。
アカオ二はもう一度言った。
「ツカマエタ」

よく私があったわね
なんか短すぎる気がしたので（よく私があったわね）という作品も載せます。

私はちょうど会社に着いたところだった。ここからは階段を使って3階のオフィスに向かう。遅刻しそうなので、いつもは使わないエレベーターを私は使うことにした。

エレベーターには人がたくさん乗っていた。6、7人ぐらいだろう。それに無理やり入り込んだ。

2階に上がった。そこでいったん止まり、ドアが開いた。そこには、青白い顔をしていて、かなり病弱そうに見える女性がいて、入ってきた。それと同時に、皆がエレベーターから出ていく。その女性と二人きりになった。

私はなぜか寒気がして、隣にいる無表情の女性が気になった。さらに悪化して、私は震えてしまうほどになった。いったいどうしたのだろう。

エレベーターが3階に上がり、私は逃げるようにして、出て行くとした。が。女性がこう言った。

「よく私があったわね」

私は金縛りにあったかのように動けなくなってしまった。首だけは動かすことができ、恐る恐る振り向いた。
そこには、血まみれの女性が立っていた。

（後書き）

いかでしたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548h/>

オニゴッコ

2010年10月8日23時35分発行